

【解題】

星野鏡三郎の事跡（5）

——『月刊 體驗教育』星野鏡三郎追悼號・「回顧談」——

解題

高島秀樹*

（一） 第六十四第 （日西會月六年四和昭） 育 教 驗 體

追悼號の
發刊について

兄 玉 九 十

常設設立者星野鏡三郎先生は七十四歳の御高齡と申せ、平素至つて御丈夫であられました。十月三十日の運動會にも、御令弟村上理事が出席せば、來賓として参加されたい御氣持さへあられた程の御元氣でしたから、今回の様な事は夢にも思はなかつた事でありました。餘りの突然の事に、只茫然といたしました。併し、かくては、先生の御精神に論ふ所ではないと思ひ直し、せめては御遺體の一部なりと集め、御靈前に手向けたいと存じまして、大急ぎで金でましたのが此の追悼號で御座ります。年末で取急ぎました為、意あつて背意はせず、爲に成は、故人に體を失する様な事がないとは申されませんが、左様な點は何卒不意御諒恕を願ひます。

月刊
體驗教育

星野先生の訃

星野先生の御發病は十一月十一日であ



しり張てに會勤定校學中星明日十二月十年七和昭
生 先 野 星 の 後 最

御家族、御兄弟、御親戚の方々に一々永訣の御挨拶を述べられ、泣き、河原兩先生には手厚き看護を寄せられ、「病室の病人面會を求むる切なり」との念報にて版付けたる兄玉校長に學校の後事を依頼せられ、「これで思ひ残す事はあやうせん。願ひに行きます」を最後の御言葉として何の苦痛もなく、塵々と永き眠に付かれたました。臨終に際しても一言の家事に關する事なく、リットン報告書問題に如何になりしかといふ質問迄せらるゝ程最後迄國家を念頭に置かれたました。又人事を慮し

りますが、病重しと感付かれて以來、病狀、手裏等、常に微細に眞り自ら醫師に質問され、同病室に力められ、醫師の先生方も感服され居りましたが十二月六日午前一時半に至り、死期を悟られ、

て後、天命を知る中に對する何の執着もなく、一々可憐なる祈をされるなど、實に終始を一貫された立派な御最後でした。

御永眠と共に校長は是非校務に致し度

本紙定 價一 部 五 錢 一 個 年 郵 稅 共 金 六 十 錢

御家族、御兄弟、御親戚の方々に一々永訣の御挨拶を述べられ、泣き、河原兩先生には手厚き看護を寄せられ、「病室の病人面會を求むる切なり」との念報にて版付けたる兄玉校長に學校の後事を依頼せられ、「これで思ひ残す事はあやうせん。願ひに行きます」を最後の御言葉として何の苦痛もなく、塵々と永き眠に付かれたました。臨終に際しても一言の家事に關する事なく、リットン報告書問題に如何になりしかといふ質問迄せらるゝ程最後迄國家を念頭に置かれたました。又人事を慮し

りますが、病重しと感付かれて以來、病狀、手裏等、常に微細に眞り自ら醫師に質問され、同病室に力められ、醫師の先生方も感服され居りましたが十二月六日午前一時半に至り、死期を悟られ、

て後、天命を知る中に對する何の執着もなく、一々可憐なる祈をされるなど、實に終始を一貫された立派な御最後でした。

御永眠と共に校長は是非校務に致し度

『月刊 體驗教育』星野鏡三郎追悼號 1 頁

* 明星大学名誉教授、元：人文学部人間社会学科教授・明星教育センター長、教育社会学



少年時代の星野先生
(立てるは十四歳の星野先生。着椅は鹿島岩藤氏^(ママ))



昭和七年十二月九日星野先生御葬式に参列せる明星中學校生徒



昭和七年十月十九日二七日忌當日午後一時星野先生墓前に参拜せる
明星中學校職員生徒一同^(ママ)

目次

はじめに

1.『月刊 体験教育』星野鏡三郎追悼號

2.掲載記事について

(1) 追悼號の發刊について(兒玉九十)

(2) 星野先生の訃

(3) 星野先生略歴及事績の概略

(4) 星野先生を憶ふ(岩河信義)

(5) 編輯後記(兒玉)

(6) 題名なし(死亡通知・葬儀について)(星野正一)・題名なし(葬儀について)(明星中學校^{メイセイ})

3. 星野鏡三郎「回顧談」

おわりに

はじめに

明星大学を設置・運営する学校法人明星学苑の淵源は1923(大正12)年に創設された明星実務学校、さらにそれを母体として1927(昭和2)年に改組・創設された財団法人明星中学校・明星中学校(旧制)である。明星実務学校・明星中学校の創設にあたって教育理念をはじめ教育のあり方を定め、その実現のために校長として教育実践に取り組んだのは兒玉九十(1888(明治21)年～1989(平成1)年)であるが、創設資金を提供したのは明治・大正期に土木工事、鉄道敷設工事、特にトンネル掘削工事に大きな業績を上げ、晩年の社会貢献として教育活動・学校設立・人材育成を志した星野鏡三郎(1859(安政6)年～1932(昭和7)年)である。

兒玉九十については自伝をはじめ多くの著書や教え子による回想記¹が刊行されており、その事跡については明らかとなっているが、それに比して星野鏡三郎の事跡については十分明らかになっていない傾向があった。そこで解題筆者は明星教育センターの研究活動の一環として星野鏡三郎に関する資料を探求し、入手できた4資料を次のように本誌『明星—明星大学明星教育センター研究紀要』に解題を付して掲載してきた。

「星野鏡三郎の事跡(1) —星野鏡三郎の「履歴書」—」 第2号 2012年

「星野鏡三郎の事跡(2) —沢和哉「土木の神様—星野鏡三郎」—」 第3号 2013年

「星野鏡三郎の事跡(3) —星野鏡三郎の実兄、星野錫の伝記『星野錫翁傳』から—」 第4号 2014年

「星野鏡三郎の事跡(4) —兒玉九十編輯・星野正一発行『父の思出』から—」 第9号 2019年

今回は(5)として、星野鏡三郎の逝去後間もなく、9日後に発行された明星中学校の機関紙『月刊 体験教育』星野鏡三郎追悼號から7点の記事と星野鏡三郎「回顧談」を掲載することとした。

1.『月刊 体験教育』星野鏡三郎追悼號

『月刊 体験教育』は兒玉九十と明星中学校の教育に関する考え方や教育実践、学校生活や生徒の活動について保護者をはじめ広く社会に広報するために1929(昭和4)年1月に創刊された明星中学校の機関紙である。発刊の趣旨について兒玉九十は第1号の冒頭に「發刊に際して」と題して次のように記している。

本校の教育方針及び日々の學校生活について家庭の方々に充分理解して戴いて教育を一層徹底させた
い、又本校教育に對する一般の批判示教も仰ぎたいといふ様な考から、月々此の様な小紙を発行する事

に致しました。

教育は斯くあるべきもの、其の實現活躍は斯々、その結果は是々といふた様な記事で、本校の日々活動のありの儘を此の小紙面に現像させたいと思ひます。…（略）…²

ここに資料として取り上げた記事・回顧録が掲載されたのは、1932(昭和7)年12月15日刊行の号であるが、号数については表記に不整合があり、1頁～8頁欄外上部には「第四十六號」、9頁～12頁欄外上部には「第四十七號」と記されており、混乱がある。しかし、明星教育センターが所蔵する『月刊 體驗教育』綴りの前後にあたる号数から推定すると本号は「第48号」と判断される。

『月刊 體驗教育』が「追悼號」として刊行された趣旨については、【資料1－①】として掲載した兒玉九十「追悼號の發刊について」に記された通りである。

『月刊 體驗教育』「追悼號」の内容について、本紙には「目次」は記載されていないが、掲載された記事の題名・著者名を目次形式にして記すと、次の通りである。

追悼號の發刊について	兒玉 九十…	1
星野先生の訃(記事・無署名)		… 1
(写真)昭和七年十月三十日明星中學校運動會にて撮りし最後の星野先生		… 1
星野先生略歴及事績の概略(記事・無署名)		… 2
弔辭	明星中學校長 兒玉 九十…	2
吊辭	生徒總代 五學年 河内 誠…	2
吊辭	明星實務卒業生總代 竹内 邦雄…	3
吊詞	明星中學卒業生總代 森谷 歳雄…	3
回顧談		
(ママ) (昭利四年三月九日明星實務學校第四回卒業式に於ける故星野鏡三郎先生訓話)		… 3
(写真)少年時代の星野先生(立てるは十四歳の星野先生。着椅は鹿島岩藤氏)		… 4
星野先生を憶ふ	岩河 信義…	6
星野鏡三郎先生を憶ふ	中學一回卒業生 森谷 歳雄…	7
(写真)昭和七年十二月九日星野先生御葬式に參列せる明星中學校生徒		… 7
故星野先生の墓前に想ふ	第五學年 庄村 義男…	7
星野先生の御逝去に際して	第五年 大平新一郎…	8
星野先生を悼む	第四學年 増田 忠一…	8
星野先生を追悼して	第四學年 北脇 保郎…	8
星野先生を悼む	第四學年 北原 貞利…	9
(写真)昭和七年十月十九日二七日忌當日午後一時星野先生墓前に參拜せる明星中學校職員生徒一同		… 9
星野先生を悼む	第四學年 山上 元…	9
星野先生を悼む	第四學年 島内 武彦…	10
星野先生の御逝去をいたむ	第三學年 田中 敏夫…	10
追悼文	第三學年 大杉泰二郎…	10
星野先生の墓前に立ちて	三學年 石原 重徳…	11
星野先生を憶ふ	第二學年 高梨榮比古…	11
星野鏡三郎先生の御靈を弔ふ	第二學年 栗林 愼…	11
星野先生を憶ふ	第二學年 櫻田 早苗…	11
星野先生の御逝去を悲しむ	第一學年 武井 格道…	12

星野先生の御逝去を悼む	第一學年 後藤 照夫…12
編輯後記	(兒玉) …12
生徒募集	…12
題名なし(死亡通知・葬儀等について)	星野 正一…12
題名なし(葬儀について)	メイセイ 明星中學校…12 ³

今回はこれらの中から、【資料1】として、①追悼號の發刊について(兒玉九十)、②星野先生の訃、③星野先生略歴及事績の概略、④星野先生を憶ふ(岩河信義)、⑤編輯後記(兒玉)、⑥題名なし(死亡通知・葬儀等について)(星野正一)、⑦題名なし(葬儀について)(明星中學校)の7点の記事を、【資料2】として星野鏡三郎の講話筆記「回顧談」を掲載した。記事の中で多数を占める弔辞・追悼文は星野鏡三郎の人柄を示すという資料的価値があるが「星野鏡三郎の事跡(4)」で紹介した『父の思出』に掲載された教員・卒業生・生徒の弔辞・追悼文と内容が重複する傾向にあるので除き、基礎的な資料(①③)、逝去・逝去後の事情を示す資料(②⑤⑥⑦)と、星野鏡三郎の人柄を示す和歌(挽歌)(④)を選択した。

2. 掲載記事について

(1) 追悼號の發刊について(兒玉九十)

この記事には、『月刊 體驗教育』を追悼号として刊行した事情が簡潔に記されている。内容は大きく2点あり、その第1は、「せめては御追憶の一部なりと集め、御靈前に手向けたい」という「追悼號」刊行の趣旨、そこに込められた思いである。その第2は、「大急ぎで企て」「年末で取り急ぎました」ための不備を詫言っている点である。これと関連して刊行日を見るならば、この文章中には直接記されていないが、刊行日は12月15日と欄外上部に記されており、記載された刊行月日の通りとすれば、12月6日の星野鏡三郎の逝去後わずか9日間という短時日で原稿執筆－編集－印刷－刊行されている。

この2点のいずれも、①星野鏡三郎の逝去が明星中學校にとってきわめて重大な事象として受け止められたこと、②逝去に対して何らかの形式で早急に対応することを強く望んだこと、③追悼号の刊行に対して、生徒の追悼文執筆を含め学校全体として短期間に全力を尽くして取り組まれたことを示唆している。

(2) 星野先生の訃

この記事には、星野鏡三郎の逝去に関連する状況が記されている。内容は大きく2点あり、その第1は、星野鏡三郎の発病から逝去にいたる状況、逝去時の状況についての記載である。11月11日の発病以来の闘病状況、逝去時の発言や態度等が記載されている。その第2は、逝去後の対応についての記載である。星野鏡三郎は伊東別荘で発病・逝去したが、その後の兒玉九十校長・明星中學校の対応、伊東における納棺式・通夜・出棺と東京本邸への帰棺と出迎え、東京本邸における通夜・葬式等について記載されている。

星野鏡三郎の逝去に関してこれまでに掲載した資料を見ると、「履歴書」は生前に作成された履歴書であって、逝去に関しては当然記載がない。「土木の神様」においては「昭和七年一二月六日、伊豆伊東の別邸で『思ひ残す事なし』の言葉を最後として病没。年七四。」とのみ記載されており、『星野錫翁傳』においては「…(略)…昭和七年十一月、伊豆伊東別邸に於て病を發し、百方手を盡したる甲斐もなく、細雨降り注ぐ十二月六日『思ひ残すことなし』を最後の言葉として、安らかに永眠した。享年七十四歳。」と簡潔に記載されている。『父の思出』所収の「年譜」においては「昭和七年 七十四歳 十一月十一日發病(肝臓硬變症)十二月六日午前十時五十二分、伊豆伊東別邸に於て、家族、兄弟、知己に夫々永訣をなし、『思ひ残す事なし』を最後

の言葉として安らかに永眠。／『法名』 明徳院鏡譽清月正道居士。／十二月九日遺志に基き近親及び會社学校関係者のみ集まり初臺本邸に於て増上寺道重大僧正臺下導師にて嚴肅なる葬儀を行ひ茶毘に附し、十二日多摩墓地に埋葬す。」とやや詳しく記載されているが、これらの3資料に比べて本資料には逝去の状況と逝去後の対応について時系列的により詳細・具体的に記載されている。特に逝去後の対応については、これまでの資料にはほとんど記載されておらず、これらの点から本資料は資料的価値が高いと判断することができる。

（３）星野先生略歴及事績の概略

星野鏡三郎の履歴・業績についてはこれまで掲載した4資料のいずれにおいても取り上げられており、「履歴書」、『父の思出』においては履歴書形式で、「土木の神様」、『星野錫翁傳』においては文章形式で記載されている。

これまで掲載した4資料の内容と今回掲載した「星野先生略歴及事跡の概略」を比較対照したが、特に大きな齟齬は見られなかった。しかし、微細な点ではあるが、次の3点については資料間における異同が見出された。その第1は、星野鏡三郎の誕生日であり、本資料においては「安政六年十二月六日」と記載されており、「履歴書」と「土木の神様」、『父の思出』においても同じく「十二月六日」と記載されているが、『星野錫翁傳』においては「十二月十一日」と記載されている。その第2は、星野鏡三郎が鹿島岩吉の知遇を得てその配下に加わった年であり、本資料においては「明治四年」と記載されているが、「土木の神様」、『星野錫翁傳』、『父の思出』においては「明治三年」と記載されている。その第3は、星野鏡三郎が鹿島組から独立して星野商店を設立した年であり、本資料においては「明治二十九年」と記されており、「履歴書」、「土木の神様」においても同じく「明治二十九年」と記されているが、『星野錫翁傳』、『父の思出』においては「明治三十年」と記されている⁴。

これら微細な点について判断・確定しがたい点は残るが、本資料と、さらに【資料2】として掲載した「回顧談」の内容も含め、これまでに上げた資料を総合するならば、星野鏡三郎の履歴・業績はほぼ明らかになったと言って良いと解題筆者は考えている。

（４）星野先生を憶ふ（岩河信義）

1. に記した理由により、本資料の多くを占める弔辞・追悼文は掲載を見送ったが、これまで解題筆者が見ることができた資料の中では「和歌(挽歌)⁵」は見られず、初めての例であるところから、ここに特に掲載した。

作者の岩河信義は明星中学校教諭として、1927(昭和2)年4月の明星実務学校から明星中学への改組時に就任した。その経歴・職務などについては現時点では十分な資料がなく把握できていないが、ここに取り上げた『月刊 體驗教育』には「發行兼編輯人」と記載されており、またこれまでに見ることでできた児玉九十の諸著作の記述などから「教頭格」であったのではないかと推測することができる⁶。

ここに掲載された7首の内容・趣旨は岩河信義が『父の思出』に記した「尊い追憶」と共通する傾向にあるが、短歌という限定された形式であるがゆえに、詠み人の思いが端的に示されている。星野鏡三郎の逝去の様子・人柄・逝去後の様子を表し、心をこめて送る内容になっているが、特に「生れ来て與へられたる行を滞りなく果し給ひき」の一首には詠み人である岩河信義が星野鏡三郎の一生をどのように認識しているかが明確に示されていると解題筆者は理解している。

（５）編輯後記（児玉）

「編輯後記」の内容は大別して2点あり、その第1は、星野鏡三郎の逝去時の明星中学校・生徒の様子である。

その第2は、逝去に伴って寄せられた懸念に対する説明である。「はじめに」に記したように明星実務学校・明星中学校の創設資金を提供したのは星野鏡三郎であるが、1927(昭和2)年に財団法人明星中学校・明星中学校(旧制)に改組され、その際に法人創設資金・基金が星野鏡三郎から寄せられ、個人経営ではなく財団となっていることから、このような説明になっている。このような記載があることは、設立後日の浅い学校の経営に心寄せる人があったことを示している。

(6) 題名なし(死亡通知・葬儀について)(星野正一)・題名なし(葬儀について)(明星中學校)

星野鏡三郎の長男星野正一による公告の内容は大別して2点あり、その第1は、逝去・逝去後の事情の報告である。前掲の記事「星野先生の訃」の内容と合わせて逝去・逝去後の事情がより明らかになる⁷。その第2は、星野鏡三郎の遺志に基づく葬儀のあり方、逝去の通知を葬儀等の終了後としたことについての説明である。

明星中学校の葬儀についての公告は、設立者の逝去であり、校葬とすべきとの考えもあるが、星野鏡三郎の遺志により校葬とせず、さらに逝去の通知を葬儀等の終了後としたことについて説明しており、星野正一の公告と同じ趣旨である。

いずれも星野鏡三郎の考え方を伝える資料になっており、この2記事を通して、星野鏡三郎は自らの逝去や葬儀によって大勢の人に迷惑をかけないようにと考えた謙虚な人柄であったのであろうと推測することができる。

3. 星野鏡三郎「回顧談」

「回顧談」の最も基本的な資料的価値は、晩年の星野鏡三郎がその生涯について自ら顧みて語っている点にある。これまで掲載した4資料に、本号に掲載した「星野先生略歴及事績の概略」を加えた5資料の内容と、「回顧談」の内容は基本的に一致しており、特に齟齬する点は見出されない。「回顧談」において星野鏡三郎は自らのそれまでのライフ・ヒストリーについて各々の時期に考えたことを交えつつ、きわめて卒直に語っている。これまでの資料に示された内容に「回顧談」の内容を加えることによって、星野鏡三郎の生涯についてはほぼ明らかにすることができたと言って良いと解題筆者は考えている。

「回顧談」全文を資料として掲載したので解題として特に付言することはないが、解題筆者としては次の3点に注目していることを記しておく。

その第1は、前文もしくは導入ともいえるべき冒頭部分において、自らについて「私は一體商人から今日迄になりました者で御座るまして、教育と言ふことに就きましては極めて不調法者で、何等申上げる程のものを持つて居らぬ者でござります」、皆様に御目にかゝり御話を申上げると言ふことは、一言申せば資格は無いのであります」と発言している点であって、ここに星野鏡三郎が自らの経歴をどのようにとらえているか、さらに、それと関連して星野鏡三郎の人柄が表れている。なお、それにもかかわらず「設立者」であること、それ以上に卒業式において学窓を離れ社会に船出する若者、その多くは実業に従事するであろう者に対して自らの実業界での経験を話すことが意味を持つと考え、その趣旨に対する校長児玉九十の賛同も得て、この「回顧談」を語ることにしたという点であり、ここに星野鏡三郎の考え方、謙虚な人柄が示されている。

その第2は、「回顧談」の本題である星野鏡三郎のこの時点までの生涯についての回顧である。内容としては、①誕生から幼少期にいたる自らと家庭の状況、②鹿島組(現:鹿島建設株式会社)における「丁稚小僧」に始まる被雇用者としての職務状況・待遇、③独立後の経営者としての職務状況が順を追って明らかにされている点である。経歴の説明はこれまでに挙げた資料の内容と重複する点が多いが、時々の苦労やいかに課題に取り組んだか等について自ら語っている点にこれまで挙げた資料とは異なる独自の資料的価値がある。

その第3は、卒業生に対する星野鏡三郎の教えである。その内容の第1は、経営者としての経験から導き出されたものとして「黄金よりも先づ以て信用」が重要であり、「人間といふものは一番先に眞面目に能く働いて、商賣に興味を持つて能く商賣の途を覚える」ことが大切であると説いている。その内容の第2は、「人間は銘々頭があり、耳もあり、眼もあり、心も勿論あり、足元がある」が、これらが「個々にばらばらに働いてはいけない」のであり、「精神を以て眼と耳と頭と足元を引締め注意したら宜しい」と説いている。ここに星野鏡三郎が自らの体験から得た教訓が明確に示されている。

「回顧談」の終わりでは、自らの少年・青年期が幕末・維新の動乱の時代であって体系的な学校教育を十分に受けられなかったことを振り返り、体系的な教育を受けて卒業していく卒業生への期待と、星野鏡三郎が「非常に困難な時代に差懸つてゐる」「景氣恢復の理由は何一つ發見出来ません」と認識している昭和初期の厳しい経済状況・社会状況の中で実社会に巣立っていく卒業生に対する激励を語っている。ここに、老後の社会奉仕として学校を設立した願い、卒業生に寄せる星野鏡三郎の思いが率直に表れている。

おわりに

以上、掲載した資料について解題筆者がどのように理解し、考えたかを中心に記してきた。先に記した内容と重複するが、これまでに明らかにしてきた資料内容と合わせ、星野鏡三郎の事跡についてはほぼ明らかにできたと考えている⁸が、さらに資料の探究を続け、星野鏡三郎の経歴や事跡、人柄について明らかにすることを自らの課題としたい。

（2019年12月・稿）

注

- 1 兄玉九十『明星ものがたり』1976年
兄玉九十伝編纂委員会編『兄玉九十自伝』1990年、等
“兄玉九十先生を仰ぐ”明星同窓会編集委員会編『兄玉九十先生を仰ぐ』1990年
- 2 兄玉九十「發刊に際して」（『月刊 體驗教育』第1号1929年、所収）1頁
- 3 『月刊 體驗教育』第48号1932年、1～12頁から各記事の題目・著者名を抽出。
- 4 これら3点のうち、第1、第3の点については、既に「星野鏡三郎の事跡（4）」の「解題」において指摘した内容と重複する（同、85頁）。
なお、第1点である誕生日については12月6日ではないかと解題筆者は考えるようになっている。第2点についてはここに掲載した「回顧談」では「十二歳の時」と記されており、「明治三年」と推測されるが、太陰暦から太陽暦への改暦、満年齢と数え年の差異などもあり、現時点では解題筆者は確定することができていない。第3点についてはこれまで取り上げた資料のほか鹿島建設（株）の資料も参照させていただいたが、現時点では解題筆者は確定することができていない。なお、第2点については「履歴書」では文章中で触れられており、履歴書形式での記載ではなく、「年」が明記されていない。
- 5 「挽歌」は中国において葬送の際に棺を挽く時にうたう歌が起源であり、そこから転じて死者を悼む詩歌を意味するようになり、和歌の世界においても一領域となっている。
- 6 就任年については、兄玉九十編輯・星野正一発行『父の思出』1933年、34頁、参照。
なお、解題筆者が「教頭格」と推測したのは、兄玉九十の旧：満州訪問に教員としては一人だけ同行していることなどからである。
- 7 発病の時期が「十一月十一日」（「星野先生の訃」）、「十一月下旬」（本記事）と、差異があるが、その他の内容は「星野先生の訃」と重複、もしくは補うものとなっている。
- 8 「ほぼ明らかにできた」と記しているのは、これまでに取り上げた資料では幼少期以降の家庭生活の状況など、解題筆者としては十分に理解できていない点が残るからである。

参考文献

『月刊 體驗教育』第48号、1932年、明星中学校刊

煩雑になることを避けるため、本稿作成に参照した参考文献であっても、「星野鏡三郎の事跡」(1)～(4)に記載した文献は全て記載を省略した。ご了解いただきたい。

付記

1. 星野鏡三郎「回顧談」については、①既に著作権の保留期間を経過していること、②初出が明星中学校(現：学校法人明星学苑)の刊行物であることから解題筆者の判断において掲載した。掲載の責任は、学校法人明星学苑・明星大学・明星教育センターではなく、解題筆者個人にあることを明記しておく。
2. 本稿は歴史的研究であると考え、全て敬称を省略させていただいた。ご了解いただきたい。
3. 資料の入手・不明点の確認等に関して、明星大学明星教育センター御厨まり子課長・長谷川倫子学芸員の協力を得た。記して、感謝の意を表します。